様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２３６５

研究課題名（和文）第二言語学習者および継承語話者による文処理と意味理解に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）Theoretical and Empirical Research on Sentence Processing and Comprehension among Heritage Language Speakers and Second Language Learners

研究代表者
平川　眞規子（Hirakawa, Makiko）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：６０２７５８０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：第二言語学習者と継承語話者の言語習得、特に文法知識と意味理解に焦点をあて、理論的および実証的研究を行った。第二言語学習者と継承語話者は、目標言語に接する時間や言語情報が教室や家庭という環境に限定されるため、母語話者並みの言語知識を獲得できない可能性がある。また獲得されたとしても、言語の理解や処理において、母語話者とは異なる振る舞いをする可能性もある。日本語の再帰代名詞や数量詞の解釈、英語の動詞のテンスとアスペクトの違いに焦点をあてた実証的研究により、母語話者との類似点や相違点が示された。また、タイ語話者や中国語話者を含めた多角的な研究により、母語の影響についても新たな考察が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
継承語話者の研究は、移民の多い北米や国際間での人の移動が多い欧州での研究が盛んであり、アジア言語と比較し、印欧語を対象とする研究が圧倒的に多い。本研究プロジェクトでは、その成果に言語類型的に異なる４つの言語（日本語・英語・中国語・タイ語）が含まれる点で、学術的意義が大きい。また、日本における外国人日本語学習者や日本語を母語とする英語学習者にとって、習得や処理過程における困難が予測される領域の一部を明らかにしたことで、有効な指導法の提案や日本語学習者や継承語保持のための支援研究へと発展させることができる点において、社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：This project explored second language acquisition and heritage language acquisition, focusing on the linguistic knowledge and comprehension processes learners acquire, both theoretically and empirically. These two groups often fall short of native-like competence, possibly due to limited language learning environments that often exist in the classroom and at home. Even if they attain very advanced levels of linguistic knowledge, they may nevertheless behave differently when processing language during language comprehension. We have examined the processing of reflexive pronouns and numeral classifiers in Japanese, tense and aspect of verbs in English, among other linguistic properties, and found both similarities and differences between second language and heritage speakers when compared to native speakers. By extending our studies to Thai- and Chinese-speakers, we have obtained novel data with evidence of cross-linguistic influence, including L1 effects in comprehension and processing.

研究分野：言語習得

キーワード：第二言語　継承語　日本語　再帰代名詞　言語理解　言語処理　言語知識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

第二言語（L2）習得研究では、統語とそれ以外の領域のインターフェイスに注目した実証的研究が盛んに行われるようになり、L2 学習者にとって習得が困難な領域は、語用や談話などの外的インターフェイスであると主張されていた(Sorace, 2000)。また、視線・読み時間・反応時間等を測定する L2 文処理研究では、L2 学習者が文の理解過程において母語話者と同じように言語情報を扱うことができない、という研究成果も報告されていた（Clahsen & Felser, 2006）。これは、L2 学習者と母語話者の違いは、統語などの言語知識にあるのではなく、処理の問題であることを示唆する。しかし、文処理を扱う先行研究の多くは、英語を対象とし L2 学習者と母語話者を比較したもので、日本語や継承語話者を含めた研究は非常に少なかった。そこで、日本語などのアジア言語を対象とした研究、また L2 学習者同様に当該言語との接触機会の限られている継承語話者を対象にした研究を行う必要性があると考え、本研究の着想に至った。

２．研究の目的

言語の処理と意味理解に関わるメカニズム、言語の習得に関わる環境および生得性の関係、第一言語（L1）・L2・継承語の知識に関わる言語間の影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、日本語・英語・中国語・タイ語を対象とし、統語的特徴の相違を踏まえ、多角的な視点から、以下に焦点を当てた実証的研究を行ない、言語処理のメカニズムと通言語的影響に関する理論的貢献を目指した：（１）日本に在住する外国人の日本語の習得と処理（２）米国に在住する日本語継承語話者による日本語の習得と処理（３）インプットが限られる日本語母語話者による英語の習得と処理。

３．研究の方法

(1) 言語知識を調べる方法：L2 学習者・継承語話者・母語話者を対象に、文法性判断・真偽値判断・音韻知覚・発話データなど種々の実験手法を用いて、主に日本語と中国語の再帰代名詞の解釈、英語の動詞形態に伴うテンスとアスペクト、日本人英語学習者の音韻識別力や発音の正確性や流暢性に焦点をあてた実験を立案し、データを収集し、分析した。
(2) 言語処理を調べる方法：自己ペース読み実験および視線解析装置を用いた実験を立案し、言語間の違いが L2 学習者や継承語話者の言語処理にどのような影響を与えるのか、また母語話者の言語処理との違いについて、得られた結果をもとに検証した。

４．研究成果

研究の主な成果として、以下の５項目についてその概要を報告する：ハワイ在住の日本語継承語話者について（4.1)、日本語の文処理に関する視線解析実験結果(4.2)、日本語および中国語の再帰代名詞に関する言語知識（4.3)、日本語およびタイ語を母語とする英語学習者のテンス・アスペクトの知識(4.4)、日本人大学生の短期留学前後における英語能力の変化について(4.5)。

4.1. ハワイ在住の日本語継承語話者について

2016 年２月より 2020 年１月までの間にハワイ大学を５回訪問し、ハワイ大学マノア校に在籍する日本語継承語話者を対象に調査を実施した。継承語話者とは家庭内で家族とのコミュニケーションに用いる言語と、家庭外の学校や仕事場を含む社会における主要言語が異なる話者を指す。それぞれの言語の接触時期や使用環境により、継承語話者の言語能力は様々に異なるため、不均衡バイリンガルであることが多い（Benmamoun, Montrul, & Polinsky, 2013: 132)。本研究での対象とした継承語話者（年齢 17―30 歳（M=20.2, SD=2.8）は、ハワイに生まれたか、または 12 歳までにハワイに移り住んだハワイ在住者で英語が日本語よりも優勢な話者、計 40 名（女性（n = 27)，男性（n = 12)，不明（n = 1)）である。40 名のハワイに在住し始めた平均年齢は 6.6 歳（0～12）であった。日本語のレベルは，Minimal Japanese Test (Maki, Dunton, & Obringer, 2003)で測られた。結果は表１の通りである。4.2 節以下に報告する実験では、MJT スコアが 46 点満点中 38 点以上の者に限定している。

表１ MJT スコア　(点)

平均	38.6 (84.0%)
SD	9.0
Max	46 (100%)
Min	14 (30.0%)

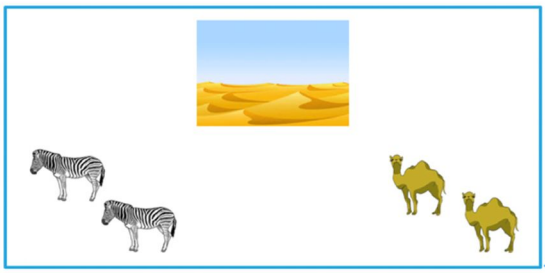
4.2. 日本語の文処理に関する視線解析実験結果

日本語母語話者、日本語継承語話者、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、再帰代名詞の先行詞解釈（長距離束縛、主語指向性）と数量詞の解釈（目的語指向性）について、視線解析実験を行なった。以下では、母語話者の数量詞の解釈に焦点を当てて研究成果の概要を述べる。

本研究では、参加者の視線データが EyeLink 1000 (SR Research)を用いて収集された。実験方法としては、Visual World Paradigm (Heuttig, Rommers, and Meyer, 2011; Tanenhaus, Spivey-Knowlton, Eberhard, and Sedivy, 1995) を用いている。また数量詞の実験材料としては、以下に挙げる２つの文タイプを含んでいる。それぞれ、数量詞２頭は目的語であるラクダ（3）かシマウマ（4）を修飾している。参加者は、図１にあるような絵を見ながら、音声刺激によるテスト文を聞き、その間の視線の動きが計測された（a look-while-listening)。

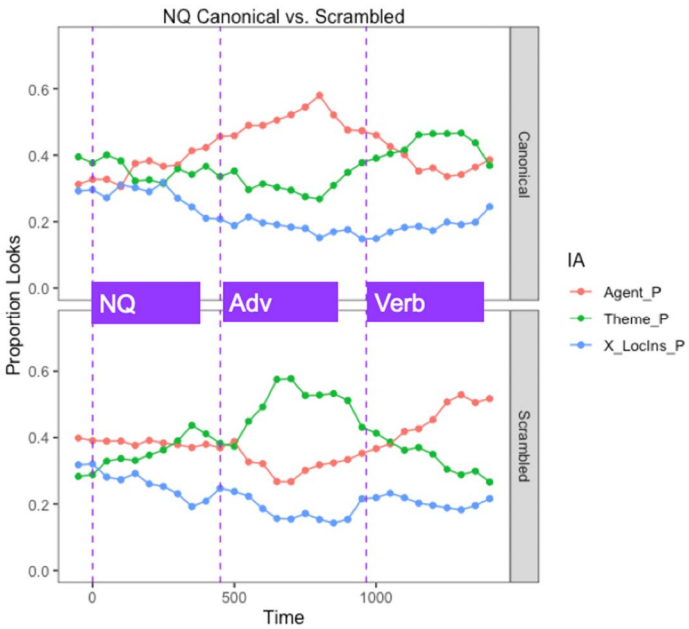
(3) 夕べ　シマウマがラクダを砂漠で２頭突然見つけました。[標準語順]
(4) 夕べ　シマウマをラクダが砂漠で２頭突然見つけました。[かき混ぜ語順（scrambled）]

図１　数量詞浮遊を含む視覚刺激の例



結果は、参加者は(3)(4)いずれの条件においても、まず最初に登場する NP に視線をむけている。図２の下半分「かき混ぜ語順(scrambled)」は、動作主（Agent）― 対象（Theme）―場所（Location）と視線が移動していることを示している。また、図 2 の上半分「標準語順」では、参加者は動作主への注視が増しており、必ずしも数量詞と結びつく対象への注視は増していないことがわかる。従って、視線解析データからは、数量詞 (Numeral Quantifier, NQ) と目的語を結びつける言語的制約が母語話者の処理においてリアルタイムに作用するという結果は得られなかった。視線解析実験の際には、オフライン実験も併用し、言語知識の確認をしている。真偽値判断タスク（Truth-value judgment task, TVJT）では、母語話者は予測通り、浮遊数量詞と目的語とを結びつけて解釈していることが示された。

図２　先行詞への注視（標準 vs. かき混ぜ）



4.3. 日本語の再帰代名詞（自分・自分自身）に関する言語知識について

日本語の再帰代名詞「自分」「自分自身」は、それ自体が指示する対象をもたないため、先行詞

を通してその指示対象が決まる。「自分」は自分を含む節外のより広い範囲での先行詞、すなわち長距離束縛を許すが(5a)、「自分自身」は最小節内にある名詞句のみを先行詞、すなわち局所性を有すると分析される(5b)。また、ともに有生性（animacy）をもつ名詞句のみを先行詞とする（6a, b）（Kuno, 1973）。

(5) a. ミカ$_i$は 太郎$_j$が 自分$_{i/j}$を批判したと 言った。
　　b. ミカ$_i$は 太郎$_j$が 自分自身*$_{i/j}$を批判したと 言った。

(6) a. 大学$_i$は、太郎$_j$が 自分*$_{i/j}$を批判したと 学長に伝えた。
　　b. 大学$_i$は、太郎$_j$が 自分自身*$_{i/j}$を批判したと 学長に伝えた。

実験では「自分」と「自分自身」の先行詞解釈における局所性(LOC/LD)・有生性の作用を調べることを目的とした。先行研究（Omaki et al, 2015）によれば、視線解析装置を用いた読み実験において、日本語母語話者は「自分」の解釈に長距離束縛バイアスが働く。また、L2 学習者は母語話者と比較して、統語的知識を即時的・漸次的に使用できないという主張がある（Felser & Cunnings, 2012）。本実験では「自分」および「自分自身」の意味解釈について、自己ペース読み実験（SPRT）と選択式先行詞タスク（AIT）を実施した。参加者は日本語母語話者（NS）51 名と中国語を母語とする上級日本語話者（CS）17 名である。AIT タスクの結果、NS と CS ともに「自分」の先行詞に強い局所性はなく、予測とは異なり非生物先行詞（[-有生性]）の選択を許している。両グループとも予測通り「自分」の長距離先行詞を許すが、その程度は CS のほうが弱い。「自分自身」については、NS、CS ともに長距離先行詞も許すという予測外の結果が示された。オフラインタスクである AIT の結果は、NS, CS ともに同様の振る舞いをしていると言える。

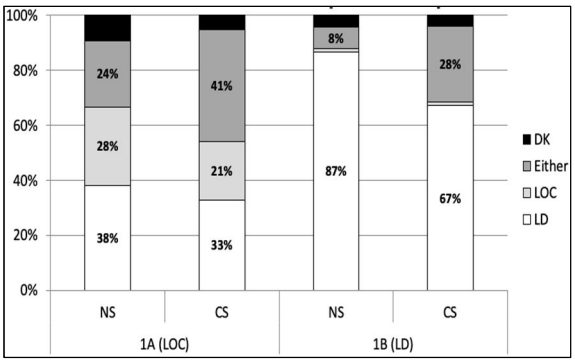


図 3. AIT “自分”

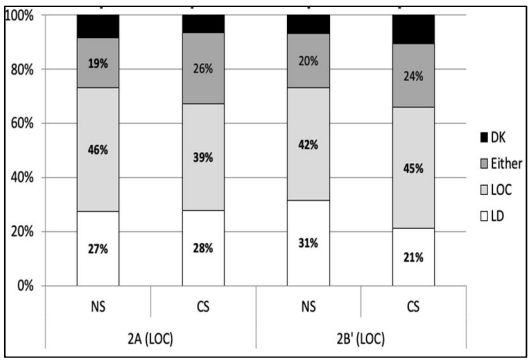


図 4. AIT “自分自身”

SPRT の結果,NS と CS による違いとして、以下が挙げられる。まず、NS は２つの領域において「自分」の読み時間は有意に長く、解釈により負荷がかかっていると解釈できる。また、非文において「自分自身」の読み時間が有意に長い点は、適切な局所的先行詞が存在しないことが関与していると考えられる。一方、CS は各条件下において、NS が示すような対照的な有意差は示されなかった。まとめると、再帰代名詞の解釈において日本語学習者は母語話者同様の言語知識を有しているものの、言語処理上では母語話者とは異なる振る舞いを示し、言語知識を即時的に使用できていない可能性が示された。

　このほかにも、長距離束縛における阻止効果に関して、実験を積み重ねながら、日本語と中国語について研究を遂行してきた。紙幅の都合上、詳細を示すことはできないが、概ね次のような成果が得られている：まず、阻止効果とは、再帰代名詞（「自分」と「zuji」）と先行詞の長距離束縛において「私」や「あなた」など１人称や２人称の主語が介在すると、長距離先行詞の解釈が阻止されることを指す。日本語を母語とする中級～上級中国語学習者と中国語母語話者、中国語を母語とする中級～上級日本語学習者と日本語母語話者を対象にした真偽値判断タスクなどの結果のよれば、日中語には阻止効果が作用する文構造が異なり、中国語ではより広範囲に阻止効果が観察される。日本語で阻止効果が働かない構文において、日本語学習者は母語（中国語）と同様に阻止効果が働くとする L1 転移が見られた。一方、中国語学習者は母語（日本語）では阻止効果が見られない構文においても、正しく阻止効果があると判断した。中級以上の学習者のため、L2 学習の初期段階での阻止効果に関する知識はさらに調べる必要があるが、今後は、観察された L2 転移の違いについて、言語学的な説明を与えることができるように検討していく。

4.4.英語のテンス・アスペクトに関する第二言語学習者の知識と処理

日本語(n=16)またはタイ語(n=21)を母語とする上級英語学習者および英語母語話者（n=18）を対象に、英語のテンス・アスペクトにする言語知識とその処理について、容認度判断タスク(AJT)および自己ペース読みタスク(SPR)を用いて調べた。特に、英語の過去形と現在完了形に注目している。副詞句との共起性において、過去のある一時点を示す句（*ago*）がある場合、動詞の過去形とは共起するが、現在完了形とは共起しない(7a, 8b)。また過去の一時点から現在に至ることを示す副詞句（*since last year*）と現在完了形は共起するが、過去形とは共起しない（8a,7b)。

English past simple [match vs. mismatch]　**Condition 1**
(7a)　Three days ago, Tom missed the bus to the main station.
(7b)　*Since last year, Kate studied Dutch and German at Oxford University.
English Present Perfect [match vs. mismatch] **Condition 2**
(8a)　Since last year, Kate has studied Dutch & German at Oxford University.
(8b)　*Three days ago, Tom has missed the bus to the main station.

Iwasaki & Ingkaphirom (2009)によれば、タイ語には文法的なテンスがなくアスペクトのみが存在するという。従って、例えば過去の出来事を言い表す場合、動詞は屈折せず、時を表す副詞（yesterday）などを用いて過去の出来事を表す。一方、日本語には英語と同様、テンスとアスペクトが存在する。AJT の結果（表２）は、L1 日本語話者が L1 タイ語話者や英語母語話者に比較して、現在完了形について正しく判断できていないことを示している。

表 2. Results of the AJT for the match and mismatch conditions

past simple	**match**	**mismatch**
NS controls	1.72	-1.10
Japanese L2 learners	1.41	-0.87
Thai L2 learners	1.60	-0.96
present perfect	**match**	**mismatch**
NS controls	1.57	-1.44
Japanese L2 learners	0.86	-1.05
Thai L2 learners	1.32	-1.00

SPR タスクの結果は、概ね AJT の結果と合致し、L1 日本語話者は英語母語話者や L1 タイ語話者とも異なる振る舞いを示し、現在完了形の match と mismatch 条件の結果に有意な差が見られなかった。一方、L1 タイ語話者は、過去と現在完了ともに 2 条件間に有意差があり、リアルタイム処理においても正しく判断できている。素性の再統合（Feature Reassembly Hypothesis）の観点から、タイ語話者は母語にない素性[+past]を新たに獲得しなければならないが、日本語話者は母語に存在する[+past][+perfective]の再統合が必要になる。本研究は、L２学習者にとって、新たな素性の獲得よりも、L1 素性の再統合がより難しいということを示唆する結果となった。

4.5. 日本人大学生の短期留学前後における英語能力の変化について

本調査は，３～４ヶ月の英語圏での滞在・学習により英語の運用能力がどの程度伸長するかについて、事前・事後の調査により確認することを目的として実施された。参加学生数は大学２年生 29 名で、留学先はマレーシア、アイルランド、ニュージーランド、カナダ、アメリカの５カ国にわたっている。調査では、(i) MET (Minimal English Test), (ii) Picture Naming Task, (iii) Perception Task, (iv) Story-telling Task の４つのテストを実施した。総合的な英語力を測る調査（i）の結果は表３に示す通りで、留学後の平均値に伸びが確認できた（p<0.001）。

表３　MET の記述統計量（72 点満点）

	留学前	留学後
平均値	39.24（SD 7.40）	44.95(SD 7.50)
最大値ー最小値	53ー25	62ー33

・全体の記述統計量について：留学前後の発話の流暢さを検討するため、参加者の発話をすべて書き起こしたものを材料とし、１分間に産出している単語数をカウントした。発話時間は 8-10 分であった。平均値はいずれも留学後の方が高い数値となった（p<0.001）。第一に、wpm の伸び率は３～４ヶ月の海外留学体験によって参加者の発話の流暢性が向上したことを示すが、必ずしも場面描写を的確に行うのに必要な語彙量の増加や運用力の向上ならびに MET のスコアの向上とは相関していない。第二に、留学前後で発話語数は伸びているにも関わらず、場面描写に直結すると想定される名詞の出現語数に変化がないことから、場面描写の最適と想定される語彙の使用に至らずとも、一般的な語彙や他の品詞を用いた迂言的な表現で場面描写を行う力が伸びたという点である。このほか、英語音声知覚・産出、文法的特徴の変化に関する調査を実施し、得られたデータならびに結果を分析したが、子音に関する音声知覚ならびに産出、産出データにみられる統語的特徴に関しては明確な違いを確認するには至らなかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　11件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 平川眞規子	４．巻 42
２．論文標題 「ジェスチャーのなぜ―日仏バイリンガル児のジェスチャーを考える―」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 AJALT （国際日本語普及協会　機関紙）	６．最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hirakawa, Makiko, Shibuya, Mayumi, and Endo, Marie	４．巻 23(2)
２．論文標題 Explicit instruction, input flood or study abroad: Which helps Japanese learners of English acquire adjective ordering?	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Language Teaching Research	６．最初と最後の頁 158-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/136216881775237	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Umeda, Mari, Snape, Neal, Yusa, Noriaki, and Wiltshier, John	４．巻 23(2)
２．論文標題 The long-term effect of explicit instruction on learners’ knowledge on English articles.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Language Teaching Research	６．最初と最後の頁 179-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1362168817739648	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Zvaigzne, Meghan, Oshima-Takane, Yuriko, and Hirakawa, Makiko	４．巻 40 (2)
２．論文標題 How does language proficiency affect children’s iconic gesture use?	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Applied Psycholinguistics	６．最初と最後の頁 555-583
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S014271641800070X.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Snape, Neal, and Umeda, Mari	4．巻 2 (2)
2．論文標題 Addressing fluctuation in article choice by Japanese learners of L2 English through explicit instruction.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Instructed Second Language Acquisition, Special Issue: Second Language Teaching and Generative Linguistics.	6．最初と最後の頁 164-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1558/isla.35594	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Snape, Neal	4．巻 2 (1)
2．論文標題 Definite generic vs. definite unique in L2 acquisition.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of the European Second Language Association	6．最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22599/jesla.46	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Suzuki, Kazunori, Shioda, Koki, and Hirakawa, Makiko	4．巻 118(163)
2．論文標題 Voice vs. Cause in L2 English by Japanese speakers.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 IEICE Technical Report (Proceedings of MAPLL × TCP × TL × TaLK 2018)	6．最初と最後の頁 73-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Umeda, Marrm Takeda, Kazue, Hirakawa, Makiko, Fukuda, Michiko, Hirakawa, Yahiro, Matthews, John, Snape, Neal	4．巻 1
2．論文標題 Acquiring antecedents for reflexives when both L1 and L2 permit long-distance binding	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of the European Second Language Association	6．最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Hirakawa, Makiko	4．巻 16
2．論文標題 Linguistic theory and second language classroom research: The effectiveness of explicit instruction	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Second Language	6．最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11431/secondlanguage.16.0_39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Suzuki, Kazunori, Hirakawa, Makiko, Fukuda, Michiko, and Jiang, Yinshi	4．巻 117(149)
2．論文標題 Comprehension and production of Chinese relative clauses by heritage Chinese speakers	5．発行年 2017年
3．雑誌名 IEICE Technical Report: Thought and Language (Proceedings of MAPLL-TCP 2017)	6．最初と最後の頁 97-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Snape, Neal, and Arakaki, Narumi	4．巻 29
2．論文標題 Brazilian Portuguese heritage speaker competence: Inflected infinitives and role of language input.	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Language, Information, Text	6．最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 鈴木一徳	4．巻 19
2．論文標題 遊離数量詞を含む日本語の自動詞文の容認可能性―干渉する付加詞の影響の検討―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 語彙研究	6．最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 鈴木一徳	4．巻 36(1)
2．論文標題 日本語の『の』の過剰使用の可能性に関する一考察―中国語の『的』の認可に着目して―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 文教大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 117-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木一徳	4．巻 35(1)
2．論文標題 第二言語としての日本語の格助詞脱落―Kanno（1996）の概観とその応用可能性―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 文教大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木一徳	4．巻 25（39）
2．論文標題 英語ストーリーテリングにおける主語名詞の具現化―パイロット研究―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 英語学・英語教育研究	6．最初と最後の頁 81-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木一徳	4．巻 11
2．論文標題 日本語の自動詞文における遊離数量詞の解釈―中国語を母語とする日本語学習者のデータから―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中国語話者のための日本語教育研究	6．最初と最後の頁 142-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武田和恵	4．巻 30 (2)
2．論文標題 身体部位を含む述部の再帰的解釈について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『文学部紀要』文教大学文学部	6．最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Matthews, J., Hirakawa, M., Takeda, K., Fukuda, M., Umeda, M., Snape, N., and Y. Hirakawa	4．巻 117 (149)
2．論文標題 Establishing reference with reflexive pronouns in the course of spoken language recognition	5．発行年 2017年
3．雑誌名 IEICE Technical Report. Tokyo: Institute of Electronics, Information and Communication Engineers.	6．最初と最後の頁 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計36件（うち招待講演　9件／うち国際学会　35件）

1．発表者名 Hirakawa, Makiko
2．発表標題 Acquisition of attributive modification by Japanese learners of English.
3．学会等名 English Linguistic Society of Japan the 12th International Spring Forum.（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Snape, N., Hirakawa, M., and Matthews, J.
2．発表標題 Tense/aspect-agreement violations in Japanese L2 English.
3．学会等名 English Linguistic Society of Japan the 12th International Spring Forum.（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Matthews, John
２．発表標題 Implicit linguistic competence and explicit language teaching, the Forum “Effectiveness of Explicit Instruction in Advancing Acquisition of Implicit Language Competence”
３．学会等名 the 19th Annual Conference of Japan Second Language Association (J-SLA 2019)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hirakawa, Makiko
２．発表標題 Acquisition following instruction: Teaching English adjective ordering. the Forum “Effectiveness of Explicit Instruction in Advancing Acquisition of Implicit Language Competence”
３．学会等名 the 19th Annual Conference of Japan Second Language Association (J-SLA 2019)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Snape, Neal
２．発表標題 Instruction without acquisition: Teaching the use of English articles, the Forum “Effectiveness of Explicit Instruction in Advancing Acquisition of Implicit Language Competence”
３．学会等名 the 19th Annual Conference of Japan Second Language Association (J-SLA 2019)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Umeda, Mari, Snape, Neal, Hirakawa, Makiko, and Matthews, John
２．発表標題 An investigation of long-distance bias in real-time processing of Japanese reflexive zibun by native and non-native speakers.
３．学会等名 the 14th Generative Approaches to Language Acquisition Conference (GALA 14).（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Snape, Neal, Hirakawa, Makiko, and Matthews, John
２．発表標題 Japanese and Thai L2 acquisition of English tense and aspect agreement.
３．学会等名 the 14th Generative Approaches to Language Acquisition Conference (GALA 14)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木一徳
２．発表標題 日本人英語学習者 による関係節の理解 ―Feature-based Relativized Minimalityに基づく分析 ―
３．学会等名 日本第二言語習得学会 第19回年次大会（J-SLA 2019）（学生ワークショップ）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小山さや香
２．発表標題 日本人英語学習者による動詞句省略の解釈
３．学会等名 日本第二言語習得学会 第19回年次大会（J-SLA 2019）（学生ワークショップ）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Suzuki, Kazunori
２．発表標題 Comprehension of object relative clauses in L2 English.
３．学会等名 Poster presented at the 5th Chuo-UHM-UTokyo Student Conference on Linguistics, Psycholinguistics, and Second Language Acquisition. University of Hawai‘i at Manoa: Honolulu, Hawai‘i, USA.（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Koyama, Sayaka
２．発表標題 Interpretation of English VP-ellipsis by Japanese-speaking learners.
３．学会等名 Poster presented at the 5th Chuo-UHM-UTokyo Student Conference on Linguistics, Psycholinguistics, and Second Language Acquisition. University of Hawai‘i at Manoa: Honolulu, Hawai‘i, USA.（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Suzuki, Kazunori, Shioda, Koki, and Hirakawa, Makiko
２．発表標題 Voice vs. Cause in L2 English by Japanese speakers.
３．学会等名 Poster presentation at MAPLL × TCP × TL × TaLK 2018. Keio University: Tokyo, Japan.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Suzuki, Kazunori, Kudo, Minako, and Hirakawa, Yahiro
２．発表標題 Acceptability of long-distance numeral quantifiers in Japanese: An experimental study.
３．学会等名 Poster presentation at the 20th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences (JSLS 2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Umeda, Mari, Hirakawa, Makiko, Snape, Neal, and Matthews, John
２．発表標題 Real-time processing of locality and animacy conditions for the Japanese reflexives by native and non-native speakers.
３．学会等名 Paper presented at Montreal Symposium in honour of Lydia White. McGill University: Montreal, Canada.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Suzuki, Kazunori and Hirakawa, Makiko
２．発表標題 Relative clauses in heritage Chinese: Explanation by the Relativized Minimality approach.
３．学会等名 Poster presented at the 28th Annual Conference of the European Second Language Association (EuroSLA 28). Munster University, Germany.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hirakawa, Makiko
２．発表標題 Interpretations of Japanese reflexive pronouns by native and non-native speakers.
３．学会等名 Plenary talk at the 4th Chuo-UHM-UTokyo Student Conference on Linguistics, Psycholinguistics, and Second Language Acquisition. University of Hawai‘i at Manoa: Hawai‘i, USA.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hirakawa, Makiko
２．発表標題 The role of explicit instruction in second language acquisition of adjective ordering in English.
３．学会等名 Invited talk at the English as an International Language Program. Chulalongkorn University: Bangkok, Thailand（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Suzuki, Kazunori
２．発表標題 Intervention effects in relative clause production in L2 English.
３．学会等名 Poster presentation at the 15th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference (GASLA 15). University of Nevada, Reno: Nevada, USA.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Umeda, Mari, Snape, Neal, Hirakawa, Makiko, and Matthews, John
２．発表標題 Native and non-native processing of the Japanese reflexives: An investigation of locality and subject-orientation.
３．学会等名 Paper presentation at the 15th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference (GASLA 15). University of Nevada, Reno: Nevada, USA.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Matthews, John, Hirakawa, Makiko, Takeda, Kazue, Fukuda, Michiko, Snape, Neal, Umeda, Mari, and Hirakawa, Yahiro
２．発表標題 Establishing reference with reflexive pronouns in the course of spoken language recognition
３．学会等名 Mental Architecture for Processing and Learning of Language, and Tokyo Conference on Psycholinguistics 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Suzuki, Kazunori, Hirakawa, Makiko, Fukuda, Michiko, and Jiang, Yinshi
２．発表標題 Comprehension and production of Chinese relative clauses by heritage Chinese speakers
３．学会等名 Mental Architecture for Processing and Learning of Language, and Tokyo Conference on Psycholinguistics 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 平川眞規子、須田孝司、Roland Douglas、Matthews, John
２．発表標題 第一言語および第二言語における文処理研究の動向
３．学会等名 日本英文学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Arakaki, Narumi, and Snape, Neal
２．発表標題 Brazilian Portuguese heritage speaker competence: Inflected infinitives and role of language input.
３．学会等名 Poster presented at the 18th Annual Conference of the Japan Second Language Association (J-SLA 2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Suzuki, Kazuori
２．発表標題 Subject noun realization in L2 English: A story-telling study.
３．学会等名 oster presented at the 21st Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences (JSLS 2019).（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Suzuki, Kazunori, and Hirakawa, Yahiro
２．発表標題 Intervention effects in relative clause production: An L2 English study.
３．学会等名 Poster presented at the 29th Annual Conference of the European Second Language Association (EuroSLA 29).（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yamashita, Junko, and Suzuki, Kazunori.
２．発表標題 Overuse of “no” in L2 Japanese: A complementizer analysis.
３．学会等名 Poster presented at the 29th Annual Conference of the European Second Language Association (EuroSLA 29).（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木一徳
２．発表標題 第二言語としての日本語習得研究―『の』の過剰使用を例に―
３．学会等名 第2回心理言語学研究会（口頭発表），東京大学 駒場Ｉキャンパス（オンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Matthews, J., Hirakawa, M., Suzuki, K., Umeda, M., Takeda, K., Fukuda, M., and Snape, N.
２．発表標題 Processing the interpretation of long distance and local anaphora with subject and object antecedents in Japanese.
３．学会等名 Paper presented at the Acquisition and Processing of Reference and Anaphora Resolution (APRAR2020, online).（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hirakawa, M., Matthews, J., Suzuki, K., Umeda, M., Takeda, K., Fukuda, M., and Snape, N.
２．発表標題 Offline judgment and online processing in interpreting floating numeral quantifiers among native speakers of Japanese.
３．学会等名 Paper presented at the 3rd International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics (ICTEAP-3). Online.（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Umeda, M., Hirakawa, M., Suzuki, K., Fukuda, M., Takeda, K., Matthews, J., and Snape, N.
２．発表標題 Re-examination of the interpretation of L2 Japanese reflexives by Chinese L1 learners: Empathy, logophoricity, and the blocking effect.
３．学会等名 Poster presented at the 16th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference (GASLA 16).（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Umeda, M., Hirakawa, M., Suzuki, K., Fukuda, M., Takeda, K., Matthews, J., and Snape, N.
２．発表標題 The blocking effect in the interpretation of Chinese reflexives by L1 Japanese learners.
３．学会等名 Poster presented at the 31st Conference of the European Second Language Association (EuroSLA 31). University of Fribourg: Fribourg, Switzerland. August 26, 2022.（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木一徳・姜銀実・平川八尋
２．発表標題 非対格・非能格自動詞構文の数量詞遊離現象における容認度―実験的研究―
３．学会等名 日本語文法学会 第18回大会（SJG 2017）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木一徳・山下順子
２．発表標題 日本語の連体修飾構造における『の』の過剰使用と脱落―韓国人・中国人日本語学習者の容認性判断課題の結果から―
３．学会等名 第二言語習得研究会 第28回大会（JASLA 2017）（口頭発表）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木一徳
２．発表標題 関係節の習得難易度再考―Relativized Minimalityの観点から―
３．学会等名 日本第二言語習得学会 第18回年次大会（J-SLA 2018）（学生ワークショップ発表）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hirakawa, Makiko
２．発表標題 Language proficiency and children’s iconic gesture.
３．学会等名 Language Acquisition, Multilingualism, and Teaching (LAMiNATE). Lund University: Lund, Sweden.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hirakawa, Makiko
２．発表標題 Acquisition of attributive modification by Japanese learners of English.
３．学会等名 Center for Languages and Literature. Lund University: Lund, Sweden.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計6件

１．著者名 鈴木 一徳・平川眞規子	４．発行年 2019年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 256
３．書名 「日本語母語話者およびスペイン語母語話者による心理形容詞の解釈― Is the lecturer bored or boring? ―」白畑知彦・須田孝司（編）「言語習得研究の応用可能性 : 理論から指導・脳科学へ」	

１．著者名 Snape, Neal	４．発行年 2020年
２．出版社 Switzerland: Springer	５．総ページ数 221
３．書名 Post-instruction processing of generics in English by Japanese L2 learners. In A. Trotzke and T. Kupisch (eds.), Formal Linguistics and Language Education.	

１．著者名 平川眞規子	４．発行年 2021年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 332
３．書名 「日本人英語学習者によるテンスとアスペクトの解釈：単純現在形 -s vs. 現在進行形 -ing」河西良治教授退職記念論文集刊行会編『言語研究の扉を開く』	

１．著者名 磯部 美和、平川眞規子	４．発行年 2022年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 368
３．書名 「言語の獲得2　第二言語の獲得」大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則（監修）『言語研究の世界』	

１．著者名 福田 倫子、小林 明子、奥野 由紀子、阿部 新、岩﨑 典子、向山 陽子	４．発行年 2022年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 180
３．書名 『第二言語学習の心理』	

１．著者名 遊佐 典昭、小泉 政利、野村 忠央、増冨 和浩　（梅田 真理、スネイプ ニール、平川 眞規子 分担執筆）	４．発行年 2023年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 400
３．書名 『言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

平川科研プロジェクト（2017-2022）
https://sites.google.com/site/hirakawakaken/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	武田　和恵 (Takeda Kazue) (10331456)	文教大学・文学部・教授 (32408)	
研究分担者	Ｓｎａｐｅ　Ｎｅａｌ (Snape Neal) (10463720)	群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・教授 (22302)	
研究分担者	福田　倫子 (Fukuda Michiko) (20403602)	文教大学・文学部・教授 (32408)	
研究分担者	Ｍａｔｔｈｅｗｓ　Ｊｏｈｎ (Matthews John) (80436906)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	梅田　真理 (Umeda Mari) (80620434)	群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・准教授 (22302)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	鈴木　一徳 (Suzuki Kazunori)		
研究協力者	小山　さや香 (Koyama Sayaka)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関